

6 海を渡った先史時代の人々



澤浦 亮平
SAWAURA Ryohei

沖縄県立博物館・美術館／主任（人類学）

島弧を形成する南西諸島は、旧石器時代の豊富な化石記録が残されており、海域アジアの人類の拡散の歴史を紐解くために極めて重要な地域である。さらに本土日本との交流や農耕の受容、空白時代など南西諸島のユニークな人類史について解説する。

海を越えた最初の人々

南西諸島の人類史は、亜熱帯性の気候と島嶼域という地理的な特性を背景とし、本土日本とは異なる独自の歩みを持つことが知られ、様々なタイミングでヒトやモノが交流し変容することで展開します。南西諸島に人類の居住が開始されるのは今からおよそ35,000～30,000年前の旧石器時代のことです。当時は最終氷期（約12～1万年前）の終わりに近いところで、現在よりも寒冷な気候でした。寒冷な気候により地球上の水が氷となって現在よりも多く極地や高山に存在し、海水準が数十～100mほど低下していたことから、陸域が現在よりも広がり、隣接する島同士が陸続きとなっていた場所もありました。しかし、島弧の多くの部分は海峡で隔てられていたため、南西諸島に到達するためには長距離の渡海を必要とした点は現在と変わることはなく、しかも世界最大規模の海流である黒潮をも越えなければなりません。したがって、最初に海を越えて南西諸島に居住し始めた人々は高度な航海技術を備えていたことになります。

当時の人々がどのような航海技術を備えていたのかを物語る具体的な証拠は遺跡から見つかってはいませんが、遺跡記録から想定される当時の技術水準と利用可能な材料に基づいて台湾と与那国島の間で実験的に3万年前の航海を再現するプロジェクトを2016～2019年に国立科学博物館が実施し大きな注目を集めました。「3万年前の航海 徹底再現プ

ロジェクト」(代表：海部陽介)です。このプロジェクトでは当初、草束舟、竹筏舟での挑戦を行いましたが、どちらもうまくいかず、最終的に男女混交の5人乗りの丸木舟で45時間をかけてとうとう航海に成功しました(写真1)。

南西諸島には隆起サンゴ礁を起源とする琉球石灰岩が広く分布しています。その石灰岩に形成された洞窟は、火山灰を起源とする本土日本の酸性土壌では残りにくい骨や貝などの保存に適しており、この当時の人類化石や動物化石が数多く見つかることが知られています(写真2)。こうした化石から当時の人々の姿かたちや、自然環境に関する貴重な情報が得られますが、海を越えて最初に南西諸島に居住し始めた人々のより具体的な暮らしを探るための材料には乏しいという状況が続いていました。

こうした中、沖縄県立博物館・美術館が2009年から進めている沖縄島南部のサキタリ洞遺跡(ガンガラーの谷内)(写真3)の発掘調査によって、海を越えて最初に南西諸島に到達した人々のユニークな暮らしが明らかとなってきました。サキタリ洞遺跡から出土した遺物からは、当時の人々は洞窟周辺の河川に生息するモクズガニやカワニナといった小動物を積極的に利用していたことが判明しました。大型のモクズガニが多いため、秋から冬にかけて産卵のために河川を下るタイミングを狙って季節的な捕獲を行っていたことが推定されます。また、沖縄島南部は利器に向けた石材に乏しいためなのか石



写真1 丸木舟「スギミ」を用いた実験航海(写真提供：海部陽介)

製の道具は僅少で、海で採れる貝を加工した小さな加工具や装飾品(ビーズ)、そしてギンタカハマという巻貝を素材とした世界最古級の釣り針が出土し、世界的にも注目を集めました(写真4)。

南西諸島のユニークな人類史

前記のように旧石器時代の豊富な化石記録が残されているという点で、南西諸島は海域アジアにおける人類の拡散の歴史を紐解くために極めて重要な地域です。しかし、その後もユニークな歴史的展開を遂げるのもこの地域の魅力です。海を越え人類が島へ渡ってきたことを南西諸島の人類史の最初の画期と捉えるなら、次の大きな変革期として注目されるのは、主に九州以北に広がっていた縄文文化との交流を続けながら独自の文化を展開した貝塚時代のうち遠方との交流が活発化する時期、そして、南西諸島が文化的に統一され周辺地域からは遅れながらも農耕を受容するグスク時代の始まりの時期でしょう。

実は、旧石器時代の最新の遺跡の年代と貝塚時

代の遺跡の最古の年代との間にはおよそ10,000年間のギャップがあり(近年徐々にこの空白期が埋まりつつあります)、この間、南西諸島周辺は無人だったのではないかと、つまり、「空白」の時代があったのではないかと、という考えもあります。旧石器時代以来、人類の居住が継続して貝塚時代が始まるのか、それとも貝塚時代に人が外部から改めて渡海して居住したのか、島嶼部への人類の進出と定着を考える上で重要な論点となるため、この問題は今後も十分な検討を要します。

さて、貝塚時代の中でも、九州以北の縄文文化との交流が活発化したタイミングとして縄文時代の後期・晩期の時期(約4,000～3,000年前)が挙げられます。この時期には、直線距離にして沖縄島から700km以上離れた佐賀県伊万里市腰岳産の黒曜石がもたらされ、さらに1,500km以上も離れた新潟県糸魚川産のヒスイも沖縄島で見つかります。さらに、晩期になると驚くべきことに2,000km以上も離れた青森県域を中心とした地域に栄えた亀ヶ岡文化の文物(土器や土製品)もが沖縄島で見つかっていま

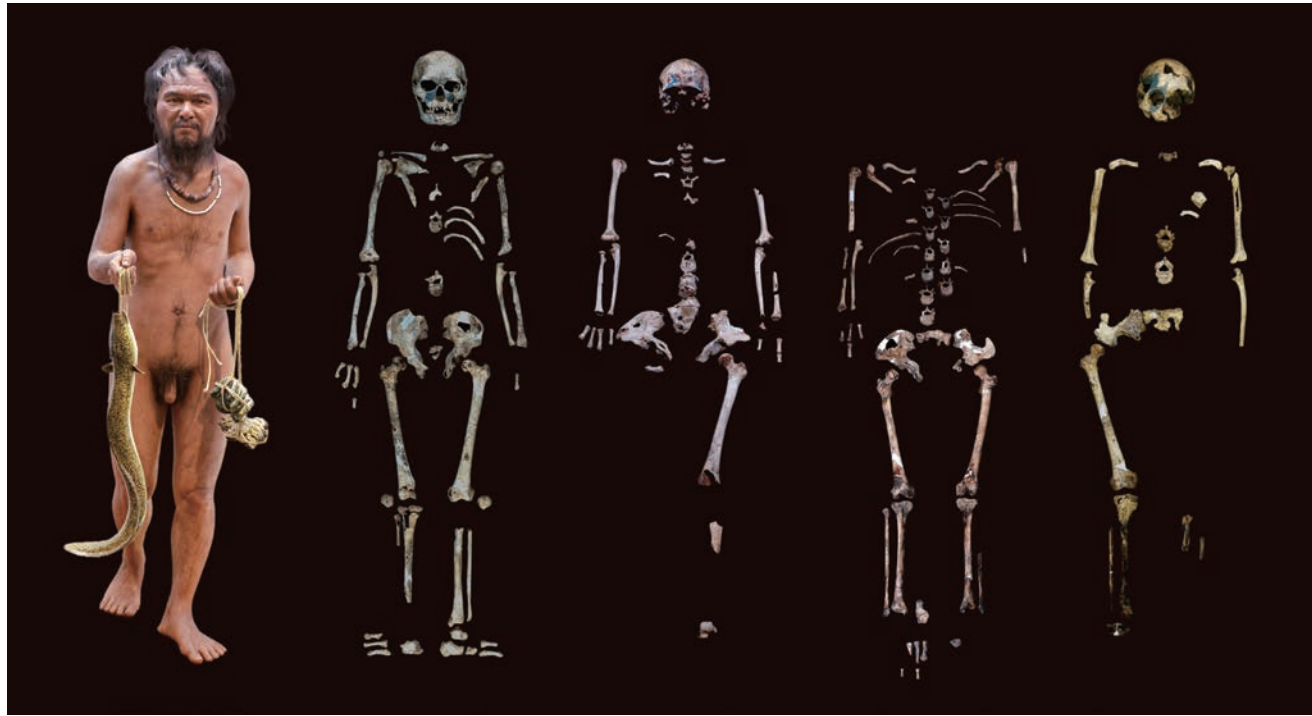


写真2 港川人1号の全身復元模型(左)と港川人(1号～4号)の全身骨格:全身骨格は左から1号、2号、3号、4号。1号と2号は東京大学総合研究博物館所蔵。その他は沖縄県立博物館・美術館所蔵

す。こうした資料は、かなり遠隔地との間に物的・人的な交流があったことを示唆するものです。

その後、弥生時代並行期以降となると南海産の貝類が北方へともたらされるようになります。いわゆる「貝の道」と呼ばれる交易ルートです。ゴホウラ、イモガイといった貝類は遠く北海道の地にまでもたらされました。

さらに時代が下り、グスク時代になると、南西諸島一帯に共通した文化圏が形成されます。また、文化的な統一とともに奄美地域を皮切りに順次農耕が受容されていくという大きな変化も起こりました。遺跡数が増加し、その立地も変化し、丘陵頂部をも利用するようになることから、急激な人口の増加が想定されています。この人口増をもたらしたのは主に農耕文化を携えて流入してきた移民だったと考えられ

ています。

篠田謙一らのグループは沖縄島、波照間島、宮古島の遺跡から出土した人骨のDNAを解析し、すべての遺跡からmtDNA※¹のハプログループ※²M7a(前代の貝塚時代に優位的)を、沖縄島と波照間島からD4(農耕技術を携えた移民と予想されている)



写真3 南城市サキタリ洞遺跡(ガンガラーの谷内)の東側洞入口



写真4 サキタリ洞遺跡出土遺物

を、宮古島からGを確認し、現代沖縄人とのハプログループの頻度到大差がないことを報告しています。さらに、篠田らは、考古学的な証拠も加味し、M7aを主体とした在来集団にD4を主体とした農耕民が進出し混血が進むことで、沖縄の遺伝的な構成が成立したというシナリオを描いています。

島弧という地理的な特性がこの時期でも鍵となっているように見受けられます。狩猟採集から農耕への変化は非常に重要な意味を持ち、なぜ、いかに、どのように変化が起きたのか(あるいは起きなかったのか)は今後も注目すべき重要テーマであり続けるでしょう。

本土日本の場合、弥生時代に水田稲作技術が北部九州に伝わり、その後、その技術を携えた人々が東進し、ヒトと文化が混じり合って変容していく歴史が知られています。近年ではダイズなどの栽培技術は縄文時代の前半にまで遡るともされます。一方、南西諸島に農耕が伝わるのは、本土日本からはだいぶ遅れます。南海産の貝は弥生時代相当期に九州以北の地域へ運ばれていくことが知られ、南西諸島

と九州以北の地域間交流は存在していたので、稲作を生業とした人々との接点は存在したはずですが、なぜこの時期になって初めて農耕が受容されることになったのか、その理由が興味深いところですが、いまだ蓋然性の高い説明はなされていません。ただ、農耕の受容を契機としてヒトと文化が混じり合い大きな変容を遂げていく様は本土日本と類似しています。なぜ、農耕技術の受容が遅れたのか、そしてヒトと文化の混交が具体的にどのようなものであったのか、南西諸島の人類史には興味の尽きないテーマが山積しています。

※1 mtDNA:ミトコンドリアDNA。細胞内小器官のミトコンドリアが独自に持つ環状のDNAをmtDNAと呼びます。mtDNAは卵細胞内のミトコンドリアに由来するため母から子へ遺伝します。突然変異率が高いことから、人類集団の関係や歴史を遺伝的に調べるために用いられます。

※2 ハプログループ:ヒトmtDNAの塩基配列の違いに基づいた分類群。それぞれのハプログループにはアルファベットと数字を組み合わせて名前がつけられています。例えば、M7a(エムセブンエー)、D4(ディーフォー)など。

<参考資料>

- 1) 海部陽介, サビエンス日本上陸 3万年前の大航海, 講談社, 2020
- 2) 高宮広人, 奄美・沖縄島先史学の最前線, 南方新社, 2018
- 3) 篠田謙一, 新版 日本人になった祖先たち, NHK出版, 2019